

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

スターリングラード

2001 (平成13) 年4月15日鑑賞

Data

監督：ジャン＝ジャック・アノー
出演：ジュード・ロウ／ジョセフ・
ファインズ／レイチェル・ワ
イズ／ボブ・ホスキンス

👁️👁️ みどころ

派手な戦闘シーンもいいが、じっと身を伏せて待つ狙撃手の仕事もすごい。予想以上の秀作。お薦め作品だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜狙撃兵（スナイパー）＞

スターリングラードは、レーニンの後を継いだソ連の指導者（独裁者）、スターリンの名を冠したソ連の都市。ここがナチスドイツに蹂躪されれば、ソ連とスターリンの権威は地に墮ちるだろう……。このような、国家の意地を賭けた、スターリングラードをめぐる独ソの攻防戦は、1942年に展開され、結果的に第2次世界大戦のターニングポイントとなった。

冒頭、雪の中にじっと身をひそめて、狼が現れるのを待つ少年時代の主人公ヴァシリ。羊飼いの家に生まれた彼は、祖父からライフル射撃を仕込まれ、メキメキと上達した。1942年、スターリングラードは陥落寸前だった。物量と機動力を誇るナチスドイツに対して、ソ連は「スターリングラードを死守せよ」との命令の下、乏しい武器の中、特攻的な作戦を強行する。しかし、戦局は好転せず、作戦指導者たちの責任問題もチラホラ出はじめた。主人公のヴァシリは、こんな状況下のスターリングラードに送られる。彼は戦地へ赴く途中、列車の中で、美しい娘ターニャを見る。

こんな環境の中、ソ連の政治士官、ダニロフは、新たな作戦を提案し、採用された。それは特殊能力をもった狙撃兵（スナイパー）による、ドイツ軍将校の狙い撃ち作戦だ。天才的狙撃手、ヴァシリは、その能力を発揮して、次々とドイツ将校を射殺。彼の活躍はダ

ニロフの広報活動により、新聞・ラジオで報じられ、ヴァシリは次第に、国民的英雄にまつり上げられていく。もちろん、ダニロフも鼻高々だ。そしてターニャもスターリングラードで、女レジスタンスとして活動していた。

ヴァシリの活躍をいつまでも許さないのがドイツ軍。ドイツ軍きつての狙撃の名手ケーニツヒ少佐が、ヴァシリ暗殺のため、スターリングラードに送りこまれ、ヴァシリの仲間とは次々と、その標的とされてしまう。

ヴァシリは、自信を失いながらも、ダニロフとターニャに励まされて、ケーニツヒとの対決にのぞんでいく。

<最高のベッドシーン>

この映画の見どころは、冒頭に約15分間続く、「プライベート・ライアン」をしのぐような、戦闘場面と言われている。もちろん、この戦闘シーンは迫力があり、独ソ戦、スターリングラード攻防戦のすさまじさを実感させてくれる。しかし、私の感想では、それ以上に素晴らしいのはヴァシリとターニャのラブシーン（ベッドシーン）。「ベッドシーン」と言っても、ホテルの中のそれではなく、連日、繰り返される戦いの合間、戦士の多くがざこ寝して、見張りが立っているという状況下で、毛布の中にくるまっての、不自由極まりない「H」である。動き回ることができない中で2人の抱擁と、声を出そうとするターニャ、その口を必死に手でおさえるヴァシリ。生命を削る戦闘の中、精神的にも極限状態となっている2人が、それでもこんな戦場のざこ寝状態の中で、男と女としての愛と肉体を確認し合うことができるのだ。この2人の手に汗を握る、緊張したベッドシーンは、歴史に残る名ベッドシーンだと思う。

<息づまる決闘>

ターニャをめぐるヴァシリとダニロフの「男の確執」をはらみながら、ヴァシリとケーニツヒとの対決は次第にクライマックスへ。ヴァシリとケーニツヒの最後の対決は、西部劇や黒澤映画の名場面とも共通するもので、そのスチール1枚で、素晴らしい絵となる。

2001年に観た映画の中で、興奮したお勧め映画の1本である。

2001（平成13）年9月記